

定家の「おもしろし」の考察

佐藤茂樹

本稿は定家の歌合判詞における「おもしろし」について考察するものである。「おもしろし」は伝統的王朝美である。それだけに、その用いられ方は多様と言える。「月の面白きに」（『源氏』桐壺）、「月さし出でて、うすらかに積れる雪の光にあひて、なかなかいと面白き夜のさまなり」（『源氏』権）の如く、月そのものを「おもしろし」とも言い、雪あかりの中の月を「おもしろし」とも解している。

素材自体の美的本性だけでなく、対象のあり様に対しても「おもしろし」と捉えているのである。歌論上の「おもしろし」とは幾分用いられ方が違うのではないかと思われる。定家が歌論書において用いた「おもしろし」は次の二ヶ所である。

むかし貫之、哥の心たくみに、たけをよびがたく、ことばつよくすがたおもしろき様をこのみて、余情妖艶

の体をよまず。

（『近代秀歌』）

その哥はまづ心ふかくたけたかくたくみに、ことばの外まであまれるやうにて姿けだかく、詞なべてつゞけがたきが、しかもやすらかにきこゆるやうにてをもしろく、かすかなる景趣たちそひて、面影たゞならず、けしきはさるから、心もそゝるかぬ哥にて侍り。

（『毎月抄』）

『近代秀歌』の例について、武田元治氏は、「『心たくみに』『たけおよびがたく』『ことばつよく』『すがたおもしろき』の四者が対等の関係で並んで、『さま』にかかつているのであろう。しかし実質的な内容を考えると、『心たくみ』は趣向の巧みなことを意味すると思われるので、『すがたおもしろき』の内容に含まれるようである」と考察されている。

又、『毎月抄』の例について、藤平春男氏は、「たくみ」を「題にもとづく場面構想の立て方が巧妙であり」、「おもしろく」を「心ひかれる味わい」⁽³⁾と考察されている。「たくみ」も「おもしろし」も趣向に関わる評語と考えられているのである。確かに、定家の「おもしろし」の判詞も、「たくみにおもしろく」、「あさやかに面白く」、「珍敷おもしろく」、「珍面白く」と評されている。「おもしろし」は「たくみ」、「めつらし」とともに用いられており、これらの評語との関連の深さがうかがえる。そこで、本稿では、「たくみ」、「めつらし」を考察した上で、「おもしろし」について考えることとする。

一

定家が「たくみ」と評した判詞は十七例ある。ここでは、具体的にその根拠が示されている例を対象とする。

(1) 「宮河歌合 右」

風もよし花をも散らせいかげせむ思ひ果つればあら
ま憂き世ぞ

右、「風もよし」とおけるより、終りの句の末まで、心詞巧みに、人及びがたきさまなれば

(2) 〔建暦三年閏九月十九日内裏歌合 一四番 寄風雑

左勝 大蔵卿〕

長月のかさなる雲のかよひちに行末とをき秋風そふく

左かさなる雲によせて閏月をそへたる、心たくみに詞いひしりて、いとよろしく侍うへに

(3)

〔建保二年八月十六日歌合 六番 秋露 右負 通具卿〕

矢田の野の色つく浅茅をしなへて白くも露の吹嵐かな

右歌もやたの野に浅茅いろつくといへる、ふるき心たくみにいひくたされて侍れと

(4)

〔建保二年八月十六日歌合 一二番 秋雁 右負 通具卿〕

秋ふけぬ衣かりかね夜や寒きつはさにくもを重ねてそ鳴

右の衣かりかね雲をかさねたる心、おもひ入てたくみには聞えはへれと

(5)

〔建保二年八月十六日歌合 四三番 秋水 左勝 通具卿〕

おもひこし生田の杜の秋風に川音すみぬ夜や更ぬらん

左河音はたくみなるさまに聞えはへれは

(6)〔百番歌合 建保四年閏六月九日 五〇番 秋 右

持 行意〕

春日山やまたかからし秋霧のうへにそ鹿の聲は聞ゆる

かすか山やま高からしとをきて、鹿のこゑ秋きり
の上に聞ゆる心、又およひかたくたくみに聞え侍
うへに

(7)〔光明峯寺撰政家歌合 貞永元年七月 七番 寄衣

恋 左持 家長朝臣〕

つゝみあまる袖の涙の泉川くちなんはては衣かせや
ま

左あまる涙の泉川くちなんはては衣かせ山、たく
みに思ひよれるよし申

(1)の例歌は花を散らすために、「風もよし」と発想する
点、意表をついた表現と言える。

春風は花のあたりをよきてふけ心づからやうつろふと
見む

(古今・春・八五・ふぢはらのよしかせ)

吹く風にあつらへつくる物ならばこのひとつとはよき
よといはまし

(古今・春・九九・よみ人しらず)

の如く、風は花のもとを避けて欲しいものとして歌われている。花吹く風を喜ばしいものとして歌うのは、「霞立つ春の山べはとほければ吹きくる風は花のかぞする(古今・春・一〇三・ありはらのもとかた)のような花の香を運ぶ風である。(1)の例歌のように、花を散らすために、風を吹かせるのは異例であり、伝統的美意識を損うものと言える。但し、こうした思いも、「思ひ果つればあらま憂き世ぞ」という徹底した観念から発想されていると見る時、「風もよし花をも散らせ」という句は散り行く花への覚悟と惜別の情として理解される。このように内容的には、過剰なまでに感情が流露した歌と言えるが、一首の構成は、下句の「あらま憂き世」を理由として上句の「風もよし花をも散らせ」が成立しているのである。このように、論理を骨組みとして発想されていることに對して、「巧み」と評されたものと思われる。

(2)の例歌は判詞「かさなる雲によせて閨月をそへたる、心たくみ」によれば、「かさなる雲」という景から、長月の「閨月」を発想したことに対して、「心たくみ」と評している。閨月は次の例歌の如く、

ひととせにかさなる春のあらばこそふたたび花を見む

とたのまめ

(後撰・春・九七・よみ人しらず)

かずしらずかさなるとしをうぐひすの声するかたのわかなともがな

(後拾遺・春・三七・藤三位)

さくらばな春くは、れる年だにも人のこゝろにあかれやはする

(和漢朗詠集・六一・伊勢、古今和歌六帖・二三五・いせ)

五月雨につづけるとしのながめには物思ひたえぬ人ぞ悲しき

(古今和歌六帖・二三八・いせ)

「かさなる春」、「かさなるとし」、「春くは、れる年」、「つづけるとし」によつて表現されている。(2)の例歌において

「長月のかさなる雲」によつて、閏月を示し、実景としての「かさなる雲」も詠んでゐる。閏月だから、「月のかさなる」のであるが、更に雲も「かさなる」という、「かさなる」を縁とした知的発想が上句には存在するのである。現象を理屈的に捉えようとする働きに対して、「たくみ」と評していると考えられる。

(3)の例歌の判詞に記す「ふるき心」とは、「やたののにあさぢ色づくあらち山みねのあは雪さむく有るらし」(新

古今・冬・六五七・人麿、八田の野の、寒く降るらし――

万葉・二三三五)の歌のことである。判詞から判断すれば、本歌の人麿歌の「みねのあは雪さむく有るらし」を「白くも露を吹嵐かな」と詠み変えた点に「たくみさ」が認められるように思われる。八田の野の色づいた浅茅原を共通の素材とし、本歌が「みねのあは雪の寒さ」を歌い、叙景に徹しているのに対し、(3)の例歌は、「色づく」ことの関連から、「露」を詠み込んでいる。本歌の人麿歌にはない、紅葉と露との縁語的関連によつて一首が形成されているのである。「色づく浅茅」だから、「露」が置く。その「露」が「嵐」に吹かれると、理屈的に捉え、色彩の対比をねらつた歌なのである。こうした知的構成に対し「たくみ」と評したものと思われる。

(4)の例歌は、「衣かりかね雲をかさねたる心、おもひ入てたくみ」と評されている。「衣かりかね」は、

夜をさむみ衣かりがねなくなへに萩のしたばもうつろひにけり

(古今・秋・二二一・よみ人しらず、萩のしたばは色づき

にけり――拾遺・雑恋・一一一九・人まろ) いもせやまみねのあらしやさむからんころもかりがねそらになくなり

(金葉二・秋・二二一・春宮大夫公実)
風さむみいせのはまをぎわけゆけば衣かりがね浪に鳴
くなり

(新古今・羈旅・九四五・前中納言匡房)
と歌われているように、「かりがね」と「衣借り」との掛
詞として表現されている。先行歌においては、「夜をさむ
み」、「あらしやさむからん」、「風さむみ」と、「寒さ」と
の関連から「衣を借りる」が意味づけられている。ところが、
(4)の例歌では、そうした伝統的な詠み方に加えて、
「衣を借りる」、「衣を重ねる」、「雲を重ねる」という連想
による着想がなされている。「衣かりかね」という歌語の
もつ、伝統的類型的な発想にのっとりながら、更に、新し
みを加えた詠み方がなされているのである。その新しみと
は「衣かりかね」という歌語のもつ伝統的用法を生かした
ところから生まれている。全くの新しい趣向ではなく、核
となる意味用法を発想の源として、生み出されたものである。
こうした、理屈を主とした知的連想による着想に対し、
「たくみ」と評したものと思われる。

(5)の例歌に歌われている「生田」は、序詞や掛詞、及び
生田川伝説を踏まえたといった伝統的な表現ではない。
「生田の森の秋の風情」に沿った歌である。判詞に記す

「河音たくみ」とは、「川音すみぬ夜や更ぬらん」という表
現の構成に対してのものと考えられる。澄んだ川音によっ
て、夜の更けたということを認識するという発想を「たく
み」と評していると考えられるのである。夜更けを歌う歌
は多くあるが、夜更けに気づいたことを歌う歌は次の例歌
があげられる。

けふわかれあすはあふみとおもへども夜やふけぬらむ
袖のつゆけき

(古今・離別・三六九・きのとしさだ)
うたたねによやふけぬらんからころもうつこゑたかく
なりまさるなり

(後拾遺・秋・三三七・藤原兼房朝臣)
ひさぎおふるをのあさぢにおく霜のしろきを見れば
夜やふけぬらん

(千載・冬・三九九・藤原基俊)
夏衣かたへすずしくなりぬなり夜やふけぬらむ行あひ
の里

(新古今・夏・二八二・前大僧正慈円)
かささぎのわたせる橋におくしものしろきをみれば夜
ぞふけにける

(新古今・冬・六二〇・中納言家持)

あやしくぞかへさは月のくもりにし昔がたりによやふ
けにけむ

(新古今・雑・一五五〇・法橋行遍)

夜が更けたことを川音の澄んだ音によって感じたというのは新味あると言つて良いだろう。「川音すみぬ夜や更ぬらん」という下句は感覚的とも言つて良い表現であるが、そこには、「夜も更けたから、静寂の中、川音も澄んでいく」という理屈による着想が認められるのである。

(6)の例歌は、判詞から判断すると、一首の着想に対して「心たくみ」と評している。一首の構成は霧の上から鹿の鳴き声が聞こえることによって、鹿のいる春日山は高いと判断するという、理のまさった知的構成の歌である。

(7)の例歌は判詞に従えば、上句と下句との関係のあり方に、「たくみ」を見ていると考えられる。この例歌の本歌は「都いでて今日みかの原いづみ河かは風さむし衣かせ山」(古今・羈旅・四〇八・よみ人しらず)である。本歌である古今歌は、「風さむし」だから「衣かせ山」と着想されている。(7)の例歌は袖が涙によって朽ちてしまったら「衣かせ山」と歌っている。本歌の古今歌と同趣向と言えが、こうした理屈をもとにした発想に対して「たくみ」と評していると思われる。

以上のように、「たくみ」と評せられる歌は、一首において、もしくは歌のある部分に対して、「だから……だ」といった、知的論理的発想によって歌が形成されている。こうした、理由づけ、理屈によって現象を捉えようとする働きに対して「たくみ」と評していると考えられる。但し、こうした論理性も、飛躍的であつたり、感覚的であつたりするが、発想の骨組みは知的論理性にあると思われる。

二

定家が「めつらし」と評した判詞例は、背定の場合二八例、否定の場合一七例(内、「あまりにめつらし」二例含む)である。「めつらしからず」と言つた否定の判詞は類型的発想の歌に対して評せられているので、考察の対象から省く。又、「めつらし」の用例も「めつらしくおかし」といったような、他の評語と併せられている例は省き、具体的に根拠が示されている例について考察する。

(8) [千五百番歌合 七八五番 秋 左勝 公経卿]

昨日みてけふみぬほと風のまにあやなくもろき嶺
のみみちは

(9) [千五百番歌合 八五二番 秋 左勝 保季朝臣]
あやなくもろき峯のみみちはめつらしくや侍らん

峯つ、きしくる、雲のたえまより夢かほのかにみか
月の影

夢かほのかになと詞のつ、きめつらしく侍へし

(10) 〔千五百番歌合 八五五番 秋 左負 顯昭〕

雨とふる紅葉の山をこえ行は身のしろ衣いろかへて
けり

もみちの山の身のしろ衣色かはれる心み所ありて
めつらしくみえ侍れと

(11) 〔光明峯寺撰政治家歌合 一二番 寄鏡恋 右勝 民
部卿典侍〕

と、めをきてさらぬ鏡の影にたに泪へたて、えやは
みえける

涙へたて、えやは見えける、めつらしくし人々

申て

(12) 〔光明峯寺撰政治家歌合 七六番 寄糸恋 右勝 兼
康〕

絶さらむ心もしらす白糸のあはをにむすふ中の契は

しら糸のあはをめつらしきよし申て

(8)の例歌の「あやなくもろき」という詞つゞきはこの例
歌でもある、『続古今』五三〇番以外には勅撰集において
は見出せない。そうした先行歌のないことに對して「めつ

らし」と評したと言えるであろう。桜は「うつせみの世に
も似たるか桜花咲くと見し間にかつ散りにけり」(古今・
春・七三・よみ人しらず)の如く、はかなく散るものとし
て歌われるのが、伝統的である。一方、紅葉は「たつた河
もみちば流る神なびのみむろの山に時雨ふるらし」(古
今・秋・二八四・よみ人しらず)の如く、錦と見立て、あ
ざやかさを賞でる対象として歌われると言つてよい。散る
紅葉も「竜田ひめたむくる神のあればこそ秋のこのはのぬ
さとちるらめ」(古今・秋・二九八・かねみの王)の如く、
はかなさよりはむしろ、そのあでやかさを歌っている。と
ころがこの(8)の例歌では、紅葉を桜の落花の如く歌つてい
る。全くの独創というわけではないが、桜に對する感覚を
紅葉に對しても適用したのが、却つて目新しく、新鮮に感
じられ、「めつらし」と評されたものと思う。桜に對する
伝統的發想を紅葉に転化した歌なのである。

(9)の例歌の「夢かほのかに」といった詞つゞきを有す例
歌はない。この表現は「夢かうつつか」といった、次に記
す古今歌群の影響がある。

ほととぎす夢かうつつかあさつゆのおきて別れし暁の
こゑ

(古今・恋・六四一・よみ人しらず)

きみやこし我や行きけむおもほえず夢かうつつかね
てかさめてか

(古今・恋・六四五・よみ人しらず)

世中は夢かうつつかうつつとも夢ともしらず有りて
なければ

(古今・雑・九四二・よみ人しらず)

これらの古今歌が「夢」か「現実」かといった明確な対
比であったのに対し、この例歌は「夢」であったことを認
めつつ、さらにそのことを補足している。古今歌の「夢か
うつつか」といった詰問調に対し、(9)の例歌は「ほのか
に」という詞によつて、より「夢」に現実感が与えられ、
かつ、浪漫性を有している。更に、「夢かほのかに」には、
かすかな驚きの気持ちが進められている。こうした点が新
しく感じられ、古今歌と似た詞づきであるのに、「めつ
らし」と評された点だろうと思われる。「めつらし」とは、
全くの独創的表現ではなく、似た表現を持ちながらも、そ
れとは違うニュアンス、新味を感じるといふ評ではないだ
ろうか。「うつつ」を消し去ったという点において、伝統
的発想における素材の転化と広く言えるように思う。

(10)の例歌は判詞に「もみちの山の身のしろ衣色かはれる
心……めつらし」と記す如く、紅葉の山を身のしろ衣で通

ると紅色に染まるという内容は珍しいと言える。「みのし
ろ衣」は八代集においては次のように詠まれている。

ふる雪のみのしろ衣うちきつつ春きにけりとおどろか
れぬる

(後撰・春・一・藤原敏行朝臣)

山ざとの草ばのつゆもしげからんみのしろ衣ぬはずと
もきよ

(後撰・羈旅・一三五四・中原宗興)

おのれかつちるをゆきとやおもふらんみのしろごろも
花もきてけり

(金葉三・春・六〇・源俊賴朝臣)

又、衣の草木による変色は「萩が花ずり」、「花ずり衣」
として次のように詠まれているものである。

けさきつるのばらのつゆにわれぬれぬうつりやしぬる
はぎが花ずり

(後拾遺・秋・三〇四・藤原範永朝臣)

夏ごろもすその原をわけゆけばおりたがへたる萩が
花ずり

(千載・夏・二二九・顕昭法師)

心をばちくさの色にそむれども袖にうつるは萩がはな
ずり

(千載・秋・二五〇・長寛法師)

秋はぎををらではすぎじつきくさの花ずり衣つゆにぬるとも

(新古今・秋・三三〇・権僧正永縁)

「紅葉」は「もみぢばをわけつつゆけば錦きて家に帰ると人々見るらん」(後撰・秋・四〇四・よみ人しらず)の如き例歌もあるが、衣に付着した紅葉であつて、紅葉による変色ではない。紅葉による衣の変色は発想としては新しいものである。但し、その新しさも「萩が花ずり」の「萩」を「紅葉」に替えたものである。伝統的発想における素材の転換による新味なのである。

(11)の例歌は下句の「泪へたて、えやはみえける」の表現に対して「めつらし」と評している。「泪へたて、えやはみえける」という詞つゞきを有す歌は見出せない。涙によつてものが見えないことを歌う歌として、「さやかにも見るべき月を我はただ涙にくもるをりぞおほかる」(拾遺・恋・七八八・中務)があげられる。「涙にくもる」といった直接的な表現に比べて、「泪へだてて」という理のまざつた比喩表現に対する把握に「めつらしさ」を理解したものとも思われる。但し、この発想は次の例歌におけるわしの山へだつるくもやふかからんつねにすむなる月

をみぬかな

(後拾遺・神祇・一一九五・康資五母)

こゑせずはいかでしらまし春がすみへだつるそらにかへるかりがね

(金葉二・春・二七・藤原成通朝臣)

月かげのつねにすむなる山のはをへだつる雲のなからましかば

(千載・釈教・一二〇七・藤原国房)

山ざとにきりの籬のへだてずばをちかた人のそでもみてまし

(新古今・秋・四九五・曾禰好忠)

「雲に隔てられて月が見えない」、「春霞に隔てられて雁の姿が見えない」、「霧に隔てられて人の袖が見えない」という発想の影響を受けている。ここにも伝統的発想における素材の転化が認められるのである。

(12)の例歌は「しら糸のあはを」という詞が「めつらし」と評されている。『万葉集』七六三番歌「玉の緒を沫緒に搓りて結べればありて後にもあはざらめやも」(紀女郎)において、「沫緒」は難解語の一つとされているが、『伊勢物語』三五段(『新勅撰』九四八)にも「玉の緒を^(むこ)あはおによりて結べれば絶えての後もあはむとぞ思(ふ)」と歌

われている。ともに「あはを」は「玉の緒」と詠み合わされてゐる。「しら糸のあはを」という詞つゞきの先行歌はない。但し、この発想も「玉の緒」から「しら糸」へと素材が転化しているだけのことである。

- (13) 〔百首歌合 建保四年閏六月九日 四一番 秋 左勝 御製〕

夕霧のまかきの秋のはなす、き遠かたならぬ袖かとそ見る

夕きりのまかきの花す、きおちかたならぬ袖みえん、まことにめつらしき心に侍へし

- (14) 〔貞永元年八月十五夜歌合 二七番 名所月 右勝 家長朝臣〕

君か代はめて、もめてむ秋の月つもれとたれもわか
の浦人

つもれとたれもわか
の浦人、姿詞めつらしく

(13)の例歌は御製の歌であり、しかも、右は定家であることより、判詞には過褒の可能性も考えられる。本歌は「山ざとにきりの籬のへだてずばをちかた人のそでもみてまし」(新古今・秋・四九五・曾禰好忠)である。(13)の例歌は、夕霧のかかる籬のすすきを人の袖かと思うという内容の歌である。「遠かたならぬ袖」という表現には、本歌の

好忠歌に対する反論とも言つて良い発想がある。こうした伝統的発想に対し、異論を唱えていることに対して「めつらし」と評したものと思われる。

(14)の例歌は「おほかたの月をもめでじこれぞこのつもれば人のおいとなるもの」(古今・雑・八七九・なりひら朝臣)の本歌取りである。判詞において「姿詞めつらし」とする「つもれとたれもわか
の浦人」は、本歌の「つもれば人のおいとなるもの」と相対し、内容的には本歌の否定の上に成立している。「つもれとたれもわか
の浦人」という詞つゞきを持つ例歌がないことが「めつらし」と評される理由であろうが、その発想は本歌の否定からきているのである。全くの新しいものというわけではない。

- (15) 〔建保二年八月十六日歌合 六番 秋露 左勝 家隆朝臣〕

乙女子が袖ふる山の玉かつらみたれてなひく秋のし
ら露

左歌をとめ子が袖ふる山に玉かつらみたれてなひく、心もめつらしく

- (16) 〔貞永元年八月十五夜歌合 三番 名所月 左持 前宮内卿〕

ひかりそふ木のまの月におとろけは秋もなかはのさ

よの中山

さよの中山、たひに出て木間の月の光そへたるに、
秋の半もおとろける心詞、めつらしく興あるのよ
し各申

(15)の例歌の本歌は「をとめが袖ふる山のみづがきのひ
さしきよより思ひそめてき」(拾遺・雑恋・一二一〇・柿
本人麿)である。判詞において、「をとめ子が袖ふる山に
玉かつらみたれてなひく、心めつらしく」と評されている。
この「心めつらし」は一首の趣向について言っている。

「玉かつら」は先行歌においては次のように詠まれており、
たまかつらはふ木あまたになりぬればたえぬ心のうれ
しげもなし

(古今・恋・七〇九・よみ人しらず)
玉かつら今はたゆとや吹く風のおにも人のきこえざ
るらむ

(古今・恋・七六一・よみ人しらず)
玉鬘たえぬものからあらたまの年の渡はただひとよの
み

(後撰・秋・二三四・よみ人しらず)
玉かつら葛木山のもみぢばはおもかげにのみみえわた
るかな

(後撰・秋・三九一・つらゆき)

枕詞として用いられるのが一般的である。一方、この(14)の
例歌は掛詞であり、「山の玉かつら」であるとともに、「乙
女子の玉かつら」でもあり、ともに乱れてなびいていると
詠まれている。「玉かつら」の枕詞としての用法ではなく、
写実的な素直な詠み方が却って新鮮なのである。枕詞を用
いながら、その用法に囚れない詠み方である。こうした、
伝統語に新しい可能性を示した点において「めつらし」と
評せられたものと思われる。

(16)の例歌の判詞は「さよの中山、たひに出て木間の月の
光そへたるに、秋の半もおとろける心詞、めつらしく」と
記されている。この判詞の眼目は、「さよの中山、秋の半
もおとろく」という関係にあると思われる。「さよの中山」
は「あづまぢのさやの中山なかなかになにか人を思ひそ
めけむ」(古今・恋・五九四・とのり)、「あづまぢのさ
やのなか山さやかにも見えぬ雲井に世をやつくさん」(新
古今・羈旅・九〇七・壬生忠岑)の如く、「さやの中山な
かなかに」、「さやの中山さやかにも」と、同音の繰り返
しによる序詞的表現が伝統的であると考えられる。それに対
して、(16)の例歌は「秋のなかはのさよの中山」と詠み、
「なか」の同音の繰り返しはあるが、倒置された詞つづき

である。ここに伝統的な詞を用いながら、それに囚れない詠み方がなされているのである。

(17) 〔千五百番歌合 八五八番 秋 左勝 前権僧正〕

秋の夜のかけみし水のうす氷月にこたふる冬はきにけり

かけみし水の月にこたふる心めつらしくや侍らん

(17)の例歌は、「おほぞらの月のひかりしきよければ影見し水ぞまづこほりける」(古今・冬・三一六・読人しらず)の本歌取りである。判詞に記す、「かけみし水の月にこたふる」という詞は、古今歌の「影見し水ぞまづこほりける」を踏まえたものと考えられる。「月光を映した水が最初に氷る」という古今歌の「こほる」という現象を、この(17)の例歌は「月にこたふる」と捉え直している。内容的には古今歌と同じであるが、水が氷るという現象を「月にこたふる」と発想した心は、感覚的でもあるが、比喩の巧みさがあると言える。それは、「月」と「こたふ」との間の論理的なつながりの疎遠さからくる感である。このように、本来、結びつき難い詞が続けられていることに對して、「めつらし」と評されたものと思われる。

以上の如く、詞つづきや発想の「珍しさ」が指摘される。先例が認められないという新しさを有している。但し、想

像も及ばないといったものではない。長明の記す「ふつと思ひも寄らぬ事」(『無名抄』〔近代歌体事〕)といったものではない。伝統的な発想における素材の転化、伝統的発想に対する否定、反論、及び、伝統的用語からの新しい詠み方によってもたらされる新味である。

三

(18) 〔建暦三年閏九月十九日内裏歌合 四番 深山月

左勝 家隆朝臣〕

月影もすめはすみけり白雲のたえすたなひく峯のこからし

しら雲のたえすたなひく山によせて、月影もすめはすみけりとをける心、誠にたくみにおもしろく侍れは

(19) 〔建保二年八月十六日歌合 七番 秋風 左勝 僧

正〕

秋きぬと風にのみやは驚かんひろはぬ袖に玉もはかなし

左ひろはぬ袖に玉もはかなしと侍、露の詞まことにあさやかに面白くみえ侍るうへに

(20) 〔建保二年八月十六日歌合 五九番 秋旅 右勝

僧正」

帰りこん程をはいつとしら露のすかるなく野に秋風
そ吹

白露のすかるなく野こそ、珍敷おもしろく聞え待
れ

(21) 〔建保五年十一月四日歌合 九番 冬野叢 右負

家隆卿〕

やたののに霰ふりきぬあらち山あらしも寒く色かは
るまで

右歌矢田野の浅茅、今更にあられの色にかはれる
心、珍面白もみえ侍るを

これらの四首については、武田元治氏により本歌が指摘
されており、前掲書において、「その本歌を取り入れて生
かす趣向の巧みさや目新しさに關して評語『面白し』を用
いた可能性が考えられる。さきに俊成が歌合判詞に評語
『面白し』を用いた用例について、歌の趣向が歌から浮き
上がった単なる知的趣向に終わらず、一首全体の特質に深
く結びついたものになっている場合に、それを認めて『面
白し』と評する傾向があることに注意したが、同様のこと
が定家の用例についても言えるようであり、さらに定家の
用例では本歌取りの歌に關して『面白し』と評する傾向が

あるようである。」と論じておられる。

(18)の例歌は、「白雲のたえずたなひく山によせて、月影
もすめはすみけりとをける心、誠にたくみにおもしろく」
と評されている。これは「月影もすめはすみけり」の句が、
本歌とされる「白雲のたえずたなびく岑にだにすめはすみ
ぬる世にこそ有りけれ」(古今・雜・九四五・これたかの
みこ)の下句「すめはすみぬる世にこそ有りけれ」を踏ま
えて、変化させている点に、「たくみにおもしろく」と評
されたとも思われる。本歌の「住めば住みぬる」という意
味を、「月影も澄めば澄みけり」と言い換えた着想の面を
評価したとも考えられるのである。しかし、(18)の例歌は
「白雲がたえずたなびく」から「月影も澄む」という理屈
によつて構成されている。ここに「たくみ」と評される理
由がある。「月影もすめはすみけり」とは「澄めば澄む」
という、単純で、かつ当たり前過ぎて、幾分不明瞭な表現
のようにも思われる。しかし、雲がくれの月も木枯しによ
り雲を吹き払い、姿を現わしたという実景を表わしている
のである。

一方、「白雲のたえずたなひく峰」とは、本歌の示す惟
喬親王の厭世的気分からくる「住みにくい世」⁽⁶⁾への暗示で
あると考える時、「月影もすめはすむ」とは、単なる景観

上のことではなく、心理的側面へと転化する。不遇をかこつ世であつても、木枯しにより雲が吹き払われるように、心の晴れる折もある、心の持ち様であると悟つた、本歌の「住めば住む」という内容が甦るのである。このように、実景を歌っていないながら、その背後に本歌取り歌としての真実の感動を詠み込んでいる点に、この歌の「おもしろし」としての本質と見ることが出来る。

(19)の例歌は「ひろはぬ袖に玉もはかなしと侍、……あさやかに面白く」と評されている。「おもしろし」は一首全体の着想に対してではなく、下句の表現に対して評されている。この(19)の例歌の下句に対しては、「浪のうつせみればたまぞみだれるひろはばそではかなからむや」(古今・物名・四二四・在原しげはる)が関係している。古今歌は、波しぶきが玉の如く乱れ散っている。しかし、この玉の如きしずくをすくえば、はかなく消えるであろうと歌っている。それに対して、(19)の例歌はこの古今歌を受けて、拾いもしないのに、露は袖にはかなく消えたと言っている。「ひろはぬ袖」という第四句は、表現上飛躍がある。「拾わなかつた露が袖に置く」という内容の省略表現である。結句の「玉もはかなし」は本歌そのままであり、袖に置いた露がたまることなく、はかなく消えることを意味し

ていると思われる。「玉もはかなし」より「ひろはぬ袖に」の句の方が特徴的な表現である。しかし、判詞によると「ひろはぬ袖」ではなく、「ひろはぬ袖に玉もはかなし」という句に対して、「面白く」と評している。「ひろはぬ袖」は本歌である古今歌の下句に対する否定、反論であるだけに、「めつらし」と評されるものである。しかし、「ひろはぬ袖」ではなく、「ひろはぬ袖に玉もはかなし」という表現に「おもしろさ」を感じたため、「めつらし」とは評されなかつたものと思われる。

(19)の例歌では、「たくみ」、「めつらし」ではなく、「あさやか」が「おもしろし」に添えられているが、この「あさやか」は「おもしろし」に対する強調だと思われる。「あさやかに見ゆ」と評される下句は、秋の訪れを知らせるかの如く、草木に露が茂く置いており、そのそばを通るだけで、露を拾うわけでもないのに袖が露に濡れてしまうという情景だろうと思われる。こうした露けき秋の情景が髣髴することに對して、「あさやかに見ゆ」と評されたものと思う。「ひろはぬ袖」という非論理的な表現は「拾わない露が袖に」という表現の省略である。又、「玉もはかなし」は、玉の如き露がはかなく消えるということだけでなく、むしろ、玉の如き美しい露に袖が濡れ、露が消えるといっ

たことの感覚的表現なのである。「玉もはかなし」にそうした意味が付加されるのは、第四句の特に「袖」とのつながりからである。袖、露、濡れるという連想の働きによるのである。

「ひろはぬ袖」は、本歌の古今歌の「ひろはぬ袖」を打ち消す歌いぶりであるが、「拾わなくても袖に露が濡れる」のであるから、その露の多さは十分想像出来る。むしろ、「ひろふ」のではなく、「ひろはぬ」だからこそその表現効果と言える。結句の「玉もはかなし」は、本歌の「はかなからむや」という疑問表現に答えたという体で、表現において、特徴的表現とは思えない。しかし、「ひろはぬ袖に」に対してのみ、「面白く」と評しているわけではない。本歌の古今歌の「はかなからむや」は、玉の如き浪しぶきが壊れてしまうことへの恐れと、哀感に満ちている。一方、(19)の例歌の「玉もはかなし」とは、上句の「秋きぬと風にのみやおどろかむ」に應じて、秋に気づくのは「風」だけでなく、露けき秋の景色についてもだという意味を有していると理解される。「玉もはかなし」は、「はかなし」という情緒的側面を否定出来ないが、むしろ、この一首にあつては、露けき情景を暗示する表現であつたわけである。「ひろはぬ袖に玉もはかなし」は秋を気づかせる情景を意

味しているのである。

「ひろはぬ袖に玉もはかなし」という詞から、露の命のはかなさへの歎きがイメージされる。しかし、この(19)の例歌にあつては、「はかなさ」への哀感よりはむしろ、露けき草木に秋の訪れを感じた作者の実感が歌われているのである。即ち、この下句には、表現から直接的に感得されるイメージとは違った意味内容を有しているのである。このように詞の持つ字義通りの意味とは違った内容を意味する表現に対して、「おもしろし」と評されるのではないかと思われる。表現から予測されるある意味からの断絶、変化に対して催す感興が「おもしろし」という評の内容ではないかと思われる。

(20)の例歌は「しら露のすかるなく野」を「珍敷おもしろく」と評している。「帰りこん程をはいつとしら露の」といった、秀句的な表現に対しては、「おもしろし」と評してはいない。「おもしろし」とは単なる表現技巧の問題ではないと思われる。「すかるなく野」とは、「すかる」の歌材としての「めつらしさ」を言うことが出来るかもしれないが、景としては珍しいものとは思われない。「白露のすかる」という句は、詞つゞき上はつながり難い、飛躍性のある表現である。「白露」と「すかる」との間に論理性は

ないのである。こうした詞をつづけている点に「めつらし」とされる理由があると思われる。待ち人がいつ帰ってくるかを知らないでいる、その寂しさの気分を下句において、具象的に表現している歌である。白露の置いた野の中、白露に濡れた鹿が鳴いているという情景を歌っている。

「しら露」は「すかる」にかかるとともに、「野」にもかかっている構成の歌である。

本歌の「すがるなく秋のはぎはら朝たちて旅行く人をいつとかまたむ」（古今・離別・三六六・よみ人しらず）の「すがるなく秋のはぎはら」は情景が明確である。それに比べて、②の例歌の「しら露のすかるなく野に」は明瞭さを欠く表現である。しかし、白露に鳴き濡れた鹿の姿を想起することによって、一首は納得されるのである。このように直観的に違和感を持つ表現も、一首の中で機能していることを認めることが出来る時に、「おもしろし」と評されるのではないかと思われる。

①の例歌は「矢田野の浅茅、今更にあられの色にかはれる心、珍面白も」と評されている。②の例歌の本歌は「やたののにあさぢ色づくあらち山みねのあは雪さむく有るらし」（新古今・冬・六五七・人麿、八田の野の、寒く降るらし——万葉・二三三五）である。又、「あらち山」は

おもひやるころさへこそくるしけれあらちのやまの
冬のけしきは

（金葉一・雑・五九七・おや）
あらち山雪ふりつもる高ねよりさえてもいづる夜はの
月かな

（金葉二・異本歌・六八五・源雅光）
と詠まれ、定家も「あらち山峰の木がらしさきだてて雲の
行てにおつる白雪」（拾遺愚草・一二五六）と詠んでおり、
雪との詠み合わせが伝統的発想と言えるであろう。しかし、
この例歌にあつては、霰が詠まれており、更に、その情景
は、「あらしも寒く色かはるまで」という程、激しく霰が
降っているのである。矢田野の色づいた浅茅が、激しく降
る霰にその色を見せないで、今、また霰の色に色変わりし
たと詠む内容を「珍面白も」と評している。寒さの現れと
して、伝統的な「雪」ではなく「霰」を詠んでいるという、
伝統的発想からの素材の転化に対して「めつらし」と評せ
られていると思う。

②の例歌の上句は、矢田野の野に霰が降る情景が歌われて
おり、具象的な表現である。それに対し、下句は「あらし
も寒く色かはるまで」と感覚的な表現である。②の例歌は
色づいた浅茅が今また、霰色に色づくという、二度の変色

を歌っているのである。又、「霰」は伝統的詠法としては聴覚的に捉えられているが、例歌は視覚的に捉えている。こうした、二度の変色、霰の視覚性という、伝統的詠法から外れた詠み方に対して抱く感が、一首にあつては、単なる異端ではなく、歌としての抒情性をもつて一首が機能していることを認める時、「おもしろし」という評になつて表れるものと思われる。

四

以上のように、伝統的詠法にかなっていない表現に対して抱く、意外感、違和感、驚きの念といった感覚が、一首の上において納得される時、「おもしろし」と評されるものと思う。「おもしろし」と評された歌は、確かに、「趣向のすぐれた」歌であり、新しく、巧みで、珍しい表現を有しているが、それは単に奇を衒つたようなものではなく、又、単なる詞上の問題だけでもない。

こうした表現が歌としての理を持つという点で、納得、共感されなければならないのである。即ち、新しさ、珍しさ、巧みさに対する、目覚めは「おもしろし」への契機とはなる。それだけに、「おもしろし」と評される歌は「たくみ」「めつらし」と並べて評されることが多いのである。

「おもしろし」と評される歌は特徴ある表現を有している。それだけに、第一印象において、まず奇異感を抱かされるのである。伝統的詠法に外れた、違和感ある表現が、伝統的詠法と同じ価値を有すと判断される時、奇異感は「おもしろし」へと変化するのだと思われる。又、こうした意外感は、伝統的な詠み方ではない歌に対してだけでなく、意味不明とも言えるような曖昧な表現に対しても同様である。「おもしろし」という評は、不思議さに目を止めるところから始まるのである。それが納得されるのは、表現が具象的であつたり、伝統上、外れる詠み方であつても、そこに真実が込められていることが理解出来るからである。四例の考察でしかないが、「和歌的常識をくつがえす詠み方、表現の裏に感動をこめる詠み方」という『定家十体』の「面白様」の例歌からの考察と、関連がある点において、定家の歌合判詞の「おもしろし」と「面白様」との間は、全く同じとは言えないまでも関係は深いと思われる。

註

(一) 松尾聰氏はその著『源氏物語を中心とした うつくし・おもしろし攷』(笠間書院 昭和五十一年刊) 一七一頁において、「音楽や、花や、もみじや、月や、水(霜・雪・水流・滝・池・海・海辺など)の景や、立派な御殿また

はその邸内や、絵や、詩歌や催など、そうした限られた、具体的な対象に接してひきおこされる『明るく晴れやかなきもち』をあらわすことば』と説明されている。歌学用語として、『和歌大辞典』（明治書院 昭和六一年刊）において、『心がたのしみ、なぐさめられるさまを言うのが本義であり、やがて興味がある、趣がある、さらに一風変わっているなどの意に転義する。逸興という面では『をかし』に近いが、情趣という面では『あはれ』に近い』と説明されている。田中俊一氏は、『歌論における『おもしろし』（『日本文芸研究』第三卷第二・三号）において、『歌論に於ける『おもしろし』を心・詞・姿に就いて考察する時、『智巧さ』として、或は表現形式上の『技巧』としてみられると同時に、『ことわりのおもしろさ』『聞きよさや新しさとしてのおもしろさ』そして『余情的表現としてのおもしろさ』がある』と考察されている。

- (2) 武田元治著『定家十体の研究』（明治書院 平成二年刊）二〇六頁。

- (3) 藤平春男著『歌論の研究』（ぺりかん社 昭和六三年刊）一四〇頁。

- (4) 片桐洋一著『歌枕歌ことは辞典』（角川書店 昭和五八年刊）四六頁。

- (5) その他、『順徳院御百首』に二首見られるが、この定家の評を、久保田淳氏は「多分にお世辞なのではないであらうか」（『新古今和歌集全評釈』）、武田元治氏は「過度に賛

辞している」（前掲書）と言われているので、考察の対象から外した。

- (6) 松田武夫氏はその著、『新釈古今和歌集』下巻（風間書房 昭和五〇年刊）において、『たえずたなびく』を「時間的なのだえのない意と解すると、この一首の場所が、かなりの高所で、それ故に住みにくい意となる。」と説明しておられる。

- (7) 「あまりにめつらし」といった判詞は、単なる異端性を示していると思われる。

- (8) 『日本古典文学大系 歌論集能楽論集』頭注一〇（三二頁）

- (9) 拙稿『定家の『面白様』の本質』（『広島女学院大学 国語国文学誌』第十八号）

〔付記〕 テキストとして、歌集は『新編国歌大観』、『千五百番歌合』は有吉保著『千五百番歌合の校本とその研究』、

『宮河歌合』は萩谷朴著『平安朝歌合大成』、その他の歌合は『群書類従』を用いた。尚、本論文は拙稿『定家の『面白様』の本質』と補い合うものである。

（本学助教授）